

# 発達教育学部はなぜ必要か 現場に求められる教員とは

## 橋本和明花園大学教授に聞く

花園大学は、19年度から「発達教育学部」を設置する構想を発表した。2012年の文部科学省調査によると、小中学生の6.5%(クラスに2~3人)が発達障害の可能性があるといる。発達障害に関する著作も多い橋本和明教授に、現在の教育現場の状況や、発達教育学部への思いを聞いた。

発達障害は周囲の人にも分かりにくく、個人差が大きい。個性なのか、障害なのか判断しにくいこともある。現在の教育現場の状況は。

橋本 文部科学省は数年前から発達障害に対する特別支援教育に力を入れており、義務教育においては少しづつレベルが上がっています。一方、思春期の時期への対応はまだまだ十分ではなく、その最たる例が高校生の発達障害への対応でしょう。日本ではかなり遅れています。個を尊重する

海外では、発達障害があっても個性として扱われたりしますが、日本の高校生の場合、学校をやめると家に引きこもり、その後も社会に出られない人が多くいます。

思春期は児童期とは異なり、「自分」が次第に築かれてきて、プライドも高くなり、大人の言うとおりにしなくなります。そうかと言って、自分でやってもうまくいかない。発達障害者のこの時期の関わりが難しくなるのは、こういうことに関係してきます。彼らの生活は、例えばゲームや

スマホに夢中になり、昼夜が逆転しているケースも多いです。2つ目は性の問題です。異性との距離が分からず、いきなり一方的に好きな女の子に「デートしたい」と申し込む人もいますが、うまくいきません。性を身に付けることは、異性との距離感を身に付けることです。でもこれは教える側にとっても教えるにくいことです。

——そういった生徒をどのように指導するのか。今後の学校現場に必要な教員とは。

橋本 私が指導した例ですが、急に女の子に近づくと男の子に「好きになった女の子」と話したい気持ちには分かるが、ルールを決めよう。まずゆっくりその女の子に近づき、1mぐらいの所で止まり、次にするべきことは「今いいですか」と承諾を得なさい」と教えました。こうした基礎的なことはなかなか教えるにくいものです。それは今までの「特別支援」特別な資格をとった人が行うもの」という認識もあつたからかもしれません。通常の学級にも発達障害の

傾向のある子が増えています。今後、教員になる人は特別支援教育を教養として身に付けることが絶対必要です。

——発達障害への理解や支援はスタート地点に立ったばかりで、十分な周知には至っていない。花園大学の取り組みについて。

橋本 小中高大で一貫した発達障害への取り組みが必要だと考えています。花大では以前から発達障害への関わりを大切に

にしたいと、該当すると思われる人たちに学生支援室を中心に教員や職員が支援しています。また外部講師を招いて「発達障害セミナー」などの取

り組みをここ10年以上も続けてきました。大学全体に支援する雰囲気があること、積み上げたノウハウを活用したいという思いもあつて、教員養成の「発達教育学部」の新設を決めました。



従来から研究を深めてきた福祉と、禅を基本とする人格教育を融合した「エデュケア(エデュケーションとケアを組み合わせた言葉)」を掲げ、人間の成長をベースにした教育を目指します。最近ではスクール・ソーシャルワーカーなど、学校現場に福祉を取り入れる事例も増えています。

発達に関する学びを深め、福祉的な考えやシステムを頭に入れながら、生徒たちと関われる教育者を育てたい。これは福祉に強い大学」としての花大の特徴だと思えます。